

新潟大学広報誌
Niigata University
Campus Magazine

新大広報

Campus forum

no.155 2005_3月号

— 卒業 —

— 修了 —

— 退任 —





新潟大学長
長谷川 彰

卒業生、大学院修了生及び 退職される教職員の皆さんへ

平成17年の早春に新潟大学を卒業される皆さん、大学院を修了される皆さん、ならびに新潟大学を退職される教職員の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。

卒業生ならびに大学院修了生の皆さんは、これまでの学究生活を通して、学問の深遠さと厳しさに触れられましたが、今後どのような道に進まれようとも、学問に対する真摯な姿勢を保持していただきたいと思います。また、皆さんがこれまでに得た成果や、新しい発見に遭遇したときの感動を若い世代に伝えていただきたいと思います。

私たちは、将来にわたり、環境問題をはじめとする様々な問題を克服し、人間の尊厳を尊重し、社会の安全を確保し、自然と人間の共生のもとで持続可能な社会の発展を目指さなければなりません。二十一世紀を担う皆さんには、先人たちの努力に学び、あらゆる分野を総合した叡知をもって、かけがえのない生命と環境を守るための可能性を追求していただきたいと思います。

また、昨今のように、不況が長引き、世界経済が低迷する時代においては、自らの専門とは異なる分野へ挑戦するたくましさを持っていただきたいと思います。このような勇氣は、新しい分野を開拓する契機ともなり得るものであります。さらに、常に新しい知識を吸収しながら、自己を改革していく自律的な姿勢を持ち続けていただきたいと思います。

退職される教職員の皆さんは、永年にわたり新潟大学の発展にご尽力いただきました。学園紛争、五十嵐キャンパスへの統合移転、国立大学の法人化をはじめ、数々の局面において新潟大学を側面から支えてこられた皆さんに、あらためて深く敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。今後とも健康には十分に留意されまして、ますます充実した日々を過ごしていただきたいと思います。

今後とも常に新しい知識を吸収しながら、
自己を改革していく自律的な姿勢を
持ち続けていただきたいと思います。

あらゆる分野を総合した叡知をもって、
かけがえのない生命と環境を守るための可能性を
追求していただきたいと思えます。

平成16年4月1日、国立大学法人新潟大学が発足しました。このたびの法人化は、競争的環境の中で活力に富む個性豊かな大学づくりを目指した改革です。これを機に、あらためて私たちは、自律と創生を理念とし、教育と研究を通じて地域と世界の着実な発展のために貢献する意思を固め、現代社会の要請に応える大学院実務法学研究科設置等の教育組織の充実、抜本的な教育課程の見直しの中での副専攻制度の導入、新しい研究分野の開拓を支援する超域研究機構の設置、知的資産の創出、保護、活用のための知的財産本部の設置等々、新しい大学づくりに取り組んできました。

新しい新潟大学の全体像は見えてきましたが、これで新潟大学の改革が終わったということではありません。むしろ、これは、新しい新潟大学を目指した出発点であり、これからも不断の改善に努め、教育研究活動の質の向上を図らなければならないと考えております。また、学外の方々の意見に耳を傾け、より社会に開かれた大学を目指したいと思っております。今後とも教職員一体となり、これまでの取り組みを着実に軌道に乗せて、法人化の目的を達成したいと思えます。

国立大学法人新潟大学が発足した今、私たちは、これまで以上に社会からの理解と支援を必要としております。卒業生と大学院修了生の皆さんにおかれましては、これからは同窓会活動などを通して、新潟大学を力強く支援していただきたいと願っております。また、退職される教職員の方々におかれましては、新しい新潟大学の発展ぶりを温かく見守り、私たちを励ましていただきたいと願っております。

ここに人生の一つの区切りを迎え、新たに出発される皆さんに、あらためて心よりお祝い申し上げます。



卒業 修了

新潟大学を卒業するにあたって

人文学部情報文化課程 佐藤 多恵子

「大学生」とは思う存分、何でもやってみることができる貴重な時間であったと思う。

大学4年間は長いようであっという間だった。私にとって大学時代とは何だったのだろうか。まず勉強、勉強=暗記であった高校とは異なり、自分の興味関心と目標が必要になる大学では、本当の意味での「学び」「知識」というものを教わったように思う。

そして対人関係。いい意味でも悪い意味でも刺激を受ける人たちとの出会いがあった。様々なところから人が集まる大学という場は、佐渡ヶ島出身の私にとって新鮮そのものであり、その中で様々な価値観を持つ人たちと接し、交友を深めることは、私の中の視野や価値観を大きく広げてくれた。

「大学生」とは思う存分、何でもやってみることができる貴重な時間であったと思う。後にも先にもこんな恵



本人後ろ

まれた身分はない。失敗も後悔もたくさんあるが、それらも含めて自分を成長させてくれた大切な経験である。充実した新潟大学での4年間に、そして私と出会ってくれた多くの人に「ありがとう」を今、いいたい。

大学生活を振り返って

教育人間科学部学校教育課程 木村 優希

私にとっての大学生活は、自分の夢を叶えるための大きな通過点であるとともに、一生の友達との出会いの場でした。

私にとっての大学生活は、自分の夢を叶えるための大きな通過点であるとともに、一生の友達との出会いの場でした。

幼稚園での教育実習では、好奇心旺盛で活発な子どもたちと関わる楽しさと、教師として子どもの思いを理解し、適切に援助する難しさを感じました。その中で、将来本当に進みたい道を見出すことができ、就職試験においても先生になりたいという思いを貫き通すことができました。

また4年間ラクロス部に所属し、8人の気の合う仲間とすばらしき先輩・後輩に出会いました。早朝から頑張った朝練、好きだった夕暮れ時の練習、滞在時間より移動時間の長い仙台遠征、騒ぎ過ぎの飲み会……多くの思い出の中でもより印象的なのは、引退試合を終えた私たち4年生の満足した表情と自然に溢れ出てくる涙でした。今思うと大学生活の中心がラクロスであったからこそ、大学生活の全てにおいて頑張れたのだと思います。

これから社会に出ても、自分を理解してくれる仲間がいることを支えに、常に目標を掲げて自分自身を向上させていきたいです。



本人右から5人目(左から5人目)

大学生活を振り返って

法学部法学科 佐々木 絢子

良い影響を与えあえる仲間に出会えたことは私にとって、とても良い思い出になっている。

4年間の大学生活は、振り返ればほんの一瞬のこのようにも思うことが出来るのかもしれない。この4年間で法学という学問だけではなく、社会的な側面や留学を経験し、自分を成長させることができた。そして、様々な良き仲間恵まれたことは私の大学生活においての一つの収穫とも言える。

沢田先生の独占禁止法ゼミでは、私にとっては初めての専門科目でのゼミ活動であった。経済法判例の研究や発表、ゼミ旅行を体験できたことは記憶に新しく、とても充実したものだった。

ドイツ・ミュンスター大学での留学生活では様々な国の学生達と交流を持ち、物事に対する積極的な側面を養い、問題解決へ向けての意欲的な態度を培うことができた。

そして何より、大学生活全体を通して良い影響を与えあえる仲間に出会えたことは私にとって、とても良い思い出になっている。大学生活を楽しめたこと自体が、大変幸運であったと思う。

卒業するにあたり、様々な方にお世話になったことをこの場を借りて心から御礼申し上げたい。



2004年9月軽井沢ゼミ旅行にて

大学生活を振り返って

経済学部経営学科 大倉 香織

ラクロス部では、素晴らしいチームメイトに恵まれ、最高の4年間を過ごすことができた。

楽しい時間は早く流れると言われるが、本当にあっという間の4年間だった。

2年次から始まったゼミ活動と4年間続けたラクロス部の両立がすごく大変で毎日悩まされたが、この2つがあったからこそ充実した4年間を過ごすことができた。

ゼミ活動では、あえて厳しいゼミを選び、自分を勉強せざるを得ない環境に置いた。そのおかげで、限られた時間を有効に使い自己の能力を伸ばす力や、今後働いていく上で大いに役に立つであろう専門分野に関する確かな知識を身に付けることができた。

そして、大学生活で一番多くの時間を過ごしたラクロス部では、素晴らしいチームメイトに恵まれ、最高の4年間を過ごすことができた。今年度は、今までにない高レベルな大会へ出場する機会を与えてもらい、恵まれた形で引退することができた。チームメイトが部活内外でいつも支えてくれたからこそ、今、振り返って自信を持って「楽しかった」と言える4年間になった。本当にありがとう。



第11回東北地区ラクロスリーグ戦決勝戦(新潟-COUGARS)2004年10月31日
(本人前列右から2人目)

卒業 修了

大学の思い出

理学部生物学科 五十嵐 麻子

何よりの収穫は、生物学科に入ったことで改めて自分は生物が好きだと自覚できたことです。

はじめての推薦で生物学科に入学し、これから迎える大学生活に不安と期待を感じていた1年生の4月が、まるで昨日のこのように思い出されます。振り返ればこれまでの4年間、実験でスケッチに本気になるあまり筋肉痛になったり、はじめてのアルバイトで棚卸に夢中になるあまり爪を割ったり、高校までとは一味違う経験をする事ができて思っていた以上に充実した日々を過ごすことができました。

そして何よりの収穫は、生物学科に入ったことで改めて自分は生物が好きだと自覚できたことです。それを子ども達に伝えたいという思いが塾講師という職業に導いてくれたように感じています。この4年間一緒に学んできた皆と別々の進路に向かうことはとても寂しいです。しかし、この学科で学んだ知識や経験、先生方や仲間たちとの思い出を大切にこれから始まる新しい生活を歩んでいきたいと思えます。



本人一番右

部活紹介

医学部医学科 堂前 圭太郎

よっしゃ、そろそろ出番や！

今日は4月7日。一年でもっとも緊張する日。一年生への部活紹介が行われる。

はぁ、ほんとやだなぁ。こんなことやってもどうせ部員なんて入らないし。だいたいひかれるんだよね.....女の子とか泣くしさ

まぁ今は服とか着られるからいいけど、一昔前なんて裸にスパッツ一丁で、白塗りだったからなぁ

酒でも飲まなきゃやってられないよ。酔っ払うと踊り間違えるしさ。

ストーリーってどんなだったっけ？ 確か、未開の部族が暴れてて、そこに神が降り立つ。んで人々にラグビーを伝えて、みんなで心を入れ替えて踊るんだったよなぁ。ゴミ袋破るタイミング間違えないようにしなきゃ..... あぁ気持ちよくなってきたぁ いい感じで酔っ払ってきたぞ

よっしゃ、そろそろ出番や！ あれ？先輩！ おきてください！ 出番っすよ！ 潰れてるじゃないですか.....

こうして一人足りないまま、怒涛の芸は開始された。



本人後列左から2人目

卒業をむかえて

医学部保健学科検査技術科学専攻 小山 哲秀

共に過ごしてきた仲間の存在。ここで出会うことの出来た全ての人が、僕にはない何かをそっと教えてくれた。

国家試験を控えたこの時期はとにかく勉強に追われる毎日。そんな時に4年間という月日を振り返ってみるといろいろな事が思い出される。1週間びっしりと埋まった時間割表を見て愕然とした2年生最初の日。夜9時近くまで実習をしていたあの日。そんな日々を共に過ごしてきた仲間の存在。ここで出会うことの出来た全ての人が、僕にはない何かをそっと教えてくれた。両親や先生、友人……すべての人が支えてくれたからこそ今の自分がある。たくさんの人に出会えて本当によかった。今はまだ一緒に大学生活を送った友人も試験のことで頭が一杯のようだ。すべてが終わった時、お酒でも飲みながら仲間たちと4年間を振り返っている自分の姿を思い浮かべながら……もう少しがんばろうかな。

大学生活のゴールラインがすぐ目の前にある。あの先にはきっと新たなスタートラインが用意されている事だろう。その先には一体どんな出会いが待っているのだろうか？今からドキドキしながらその日を待つことにしよう。



本人最後列一番左

卒業

歯学部歯学科 小原 彰浩

すばらしい仲間にも出会い、たくさんの刺激を受け、たくさんのことを知った。

先日、失くしていた学生証がでてきた。といっても6年の夏に失くしてしまった古い方のものである。覚えがないことなのだが、本棚の中で本の架にされていた。学生証の写真には学らんを着た入学直前の自分。思わず、“若いなあ。”まだ24の自分が言うのも変なことかもしれないけれど。こんな自分も今年“卒業”を迎える。6年間いろいろなことがあった。すごく充実していたと思う。講義に実習にと歯医者タマゴとしての勉強の日々。すばらしい仲間にも出会い、たくさんの刺激を受け、たくさんのことを知った。僕はこの6年間のこと、みんなのこと、忘れない。卒業、私は大学院に残り、みんなもそれぞれこれから一歯科医として様々な進路に進んでいく。でも、行先は別々だけれども、僕らは、新大歯35期のメンバーとして、6年間ともに頑張った仲間として、お互いをこれからもずっと刺激しあい、よい歯科医を目指していけたらと思う。そしてあと10年後、一回りも二回りも大きくなってみんなで会いたい。僕もそうなれるよう頑張る。



(写真は旅行先にて。一番下が私)

卒業 修了

卒業研究の思い出

農学部生産環境科学科 山崎 美佳

新緑のブナ林、満天の星空、紅葉越しの青い空、そしてシラネアオイの凜とした姿に立ちすくみ感動した。

自分の周りには野生動物が住んでいる。当然のことなのだけれど、それを実感できる機会はとても少ない。一昨秋、卒業研究のテーマで迷っている時に研究室の先輩が調査の手伝いで十和田湖岸のブナ林に連れていってくれた。そこで、森の小さな、小さな動物に出会って一目惚れ。

卒論のテーマは決まったけれど、調査地に選んだ入広瀬村(当時)はまだまだ雪の中。やっと6月に雪が融け、そこから格闘が始まった。かわいい森の動物は、夜行性。懐中電灯をもって森の中を徘徊する夜の調査で、足があざだらけになった。かわいいとはいえ、ちょっと油断をすると指を噛まれた。そして、調査に行くたび、豪雨、台風、そして地震。どうなっているのって泣きそうになったけれど……、新緑のブナ林、満天の星空、紅葉越しの青い空、そしてシラネアオイの凜とした姿に立ちすくみ感動した。本当に毎日、毎日が新鮮だった。

これからは、私が誰かに毎日違う森の表情と森のかわいい動物たちのことを少しでも伝えていけたらいいなと思っている。



四年間を振り返って

工学部電気電子工学科 佐藤 圭吾

一人暮らしをすることによって、親のありがたみなどを実感することができました。

新潟大学に入学してからあっという間に大学を卒業することになりました。しかし、振り返ってみると大学生活は非常に充実し、有意義な時間だったと思います。

大学に入ると同時にアパートで一人暮らしを始め、最初のうちは不安なことも多かったのですが、一人暮らしをすることによって、親のありがたみなどを実感することができました。また、大学生活では、思った以上に取得しなければならない教養や専門分野の単位が多く、レポートやテストに苦しんだ毎日でした。しかしその中でも共に夜遅くまで勉強したり、遊びに行ったりする数多くの友人に出会いました。この大学生活4年間で得た友は一生の宝だと私は思います。

今、卒業というひとつの節目に立ち、ここからの一歩が新たな夢への旅立ちであると信じて、様々なことに挑戦していきたいと思います。最後に、お世話になった先生方、研究室の先輩達、そして、4年間の新潟大学での生活を充実なものにしてくれた友達に感謝したいと思います。



本人最前列左から2人目(右から4人目)

修了に当たって

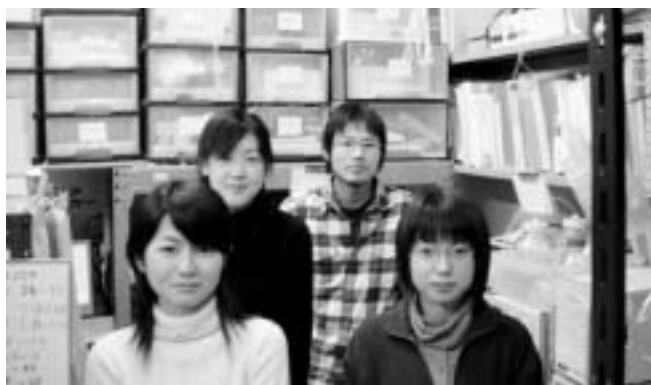
大学院自然科学研究科 菊地 寛子

新潟のそして新潟大学の団結力は、新しい年とともにさらに強まっていると思います。

大学院博士前期課程2年間の研究において、私のこれまでの学生生活の中で、最も密度の濃いものとなりました。私は、大学院からこの新潟大学にきたため、当初はそれこそ右も左も分からない状態からのスタートでした。慣れない環境の中、何度も挫折しかかった私ですが、先生方の丁寧なご指導や研究室の人達の温かな支えにより、この2年間で充実したものとなりました。

去年の新潟は、災害の被害によりとてもつらい年でした。しかし、新潟のそして新潟大学の団結力は、新しい年とともにさらに強まっていると思います。そして、そのような中、最もすばらしく感じたものが人と人との繋がりでした。研究においても、じっくりと腰を据えて挑むことができ、実りの多いものとなりました。

今後は、社会に出ることになりますが、新潟で培った経験を糧に、よりいっそう努力していきたいと思います。本当にありがとうございました。



本人前列右

修了にあたって

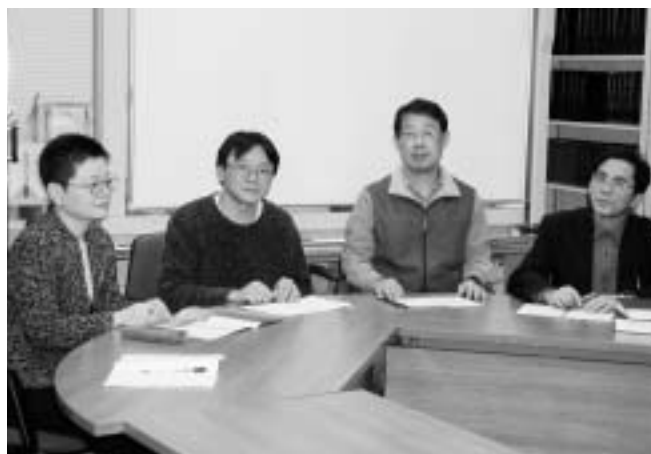
大学院現代社会文化研究科 江 春華

自分を励まし支えてくれた多くの方々に感謝いたします。

小さい頃、博士号を取るの私の夢でした。今、その夢が実現したのです。日本で博士号を取れるなんて全く思いもよりませんでした。けれども、今の心境は複雑です。博士号を取って率直にうれしい一方、現社研での院生生活が何年にもなるので、この研究生活に未練が残るからです。また、新しい旅立ちに多少の不安を感じています。

院生生活を振り返ると、博士論文を書く過程は辛く苦しいものでした。何度も投げ出しそうになりましたが、その都度、指導教官の一人である藤井隆至先生の言葉を思い出しました。「飢え死にした院生はいない」と。この言葉は、先生の院生時代に語り継がれていたようですが、トコトン自分が選んだ道に進めという意味です。自分を励まし支えてくれた多くの方々に感謝いたします。

私は、人生の目標の1つを達成しましたが、これは新しい旅立ちも意味します。感謝の気持ちを忘れずに、前進していきたいと思っています。



本人左から2人目

退任



退任にあたって

医歯学系教授（医学部保健学科）
小林 悌二

ただ静まり返って黒板を写すだけの妙な空気が段々と質問が出るように変わり、嬉しい経験になりました。

2年前、東北大学定年と同時に、思いもかけず引続き教育研究の機会を与えていただき、仕事を継続し乍ら故郷で教育に参加できる喜びで放射線技術科学専攻に着任、45年ぶりに故里の住民になりました。そして再定年です。

授業では放射線物理学と教養の物理学を担当。大学を代わることは大変新鮮な気持ちになるものです。以前から、毎年同じやり方の講義はしない、と決めて（さて出来るか？）、工夫に努めてきたのですが、環境変化の新鮮さに助けられ学生さんの反応に教えられ、何とか続けることができました。

最近の傾向ですが、物理の広い基本を必須とし、数学も広く使う分野に来る学生でも、これらに余り接して来

ない者が少なくない数でいます。足並み揃えには時間と工夫を要します。本来通して学んで相互に効果のある科目内の各内容分野が改革で個別科目に分立し選択科目化された結果、所定単位数を満たす最少限の選択をし、他はもう選択しない傾向が出ています。選択幅を広くし関心・必要に応じた自分に適合の授講組立てが出来るようにとの改革が最少限選択組をも増やしました。

「物理は苦手」ときっぱり宣言する学生さんと話しますと、これ迄の経験が「計算ばかりだった」「公式の暗記だった」が多く、物の理りを探る魅力は経験してません。そこで持論の「物理には暗記するものは何んにもないよ。理解することだけなんだよ」と一寸極端な言い方をし、「暗記型で勉強せず、理解型で勉強すればこんなに面白いものはないよ」「質問でうるさい授業大歓迎」とも促していましたら、最初ただ静まり返って黒板を写すだけという妙な空気が段々と質問が出るように変わり、嬉しい経験になりました。

始まった大学大変化を、中にいて見ることは出来なくなりますが、この2年間楽しく教育研究をさせていただきました大学、お世話になった皆様、ありがとうございました。



春山の空気を吸って一休み



退任に際して

人文社会・教育科学系教授（経済学部）
青山 功

経済学部籍を置き教育・研究に微力を尽くせたことはなんともいっても幸せでした。

昭和41年の赴任だから、もう40年ちかく前のことになる。経済学部が人文学部の経済学科として組織替えし

て定員増となったその初年度の採用であった。それまで7名であった定員が倍増し、経済学専攻の先生方の意気は高まっていた。そのような時期の赴任である。経済学部は、その後現在の姿にまで発展整備されるが、その一部始終を間近で見聞きすることになった。

それもあってか、大学の五〇年史の編纂にあたっては「経済学部」を担当した。二十五年史を継ぐものであるが、その年史は斎藤悟郎先生が担当されたので、先生の収集された大学発足当時から法文学部時代までの資料を引き継いだ。資料は、その時期の状況を彷彿とさせる会議のメモ、書簡類、二十五年史の草稿や感想等である。五〇年史のため資料を読み進めたが、大学発足前後の事情や経済学科への組織替えへの経過などは（執筆者の斎藤悟郎先生が学科主任という責任者であったため）筆に力がこもり、熱気があふれていた。気迫と熱意に満ちた先生の姿勢をみるおもいである。

ぜひ、経済学部草創期の先生方の熱気とともに、経済学部の前史を読み解く資料として保存してもらいたいものである。

大学広報への寄稿文として、退任に際しての文をと題を与えられて考えを巡らしているとどうしても想いは昔に遡り、思い出話になってしまいます。思えば、経済学科から経済学部へという活気に満ちた時期に、経済学部に籍を置き教育・研究に微力を尽くせたことはなんといっても幸せでした。心からの感謝の言葉を添えてキャンパスを去りたいと思います。



新潟大学を退任するにあたっての思い

自然科学系教授（工学部）
石井 郁夫

知識を教えることよりも学生一人一人に将来の理想や希望を形成するためのアドバイスを与えることが大切であると感じています。

設立されて間もない工学部電子工学科に1964年に赴任してから41年になります。1977年に情報工学科が設立されて移動、そして1995年からは大学院自然科学研究科に勤務しました。この間、コンピュータのハードウェア領域の教育を担当しながら、画像による空間認識に興味を持ち、3次元画像計測や人工現実感の研究を行ってまいりました。人工現実感技術は様々な分野での応用が期待され、夢が語られていますが、人間の空間認知能力が高く、まだ満足できる現実感が得られないのが現状です。幸い若い人たちの関心が高く、遠からず実用的な技術が開花すると思いますので、若い研究者、技術者の挑戦を期待します。

長い間ハードウェア教育を担当して感じることは、現在のコンピュータが性能の追求によって高度化が進み、入門者にとってきわめて敷居の高い存在になってしまったことです。自分は幸いLSIコンピュータの黎明期以前のきわめてベーシックなコンピュータからその発展と共に歩んできたために、コンピュータを恐れることなく楽しく付き合うことができました。コンピュータハードウェアのブラックボックス化は情報技術者の思考の幅を狭めますので、ベーシックな部分からはじめて、常に疑問と興味を持ってハードウェアとも付き合っていたきたいと思います。

私は常に若い学生からエネルギーを貰って過ごしてき

ました。クラブ活動の顧問や学友会の文化本部長も務めさせていただきました。クラブ活動では自主性と目的を持って活動しているために学生が生き生きしています。その経験から、知識を教えることよりも学生一人一人に将来の理想や希望を形成するためのアドバイスを与えることが大切であると感じていますので、若い先生方はぜひ実践してください。

在勤中ご指導、ご支援を賜りました教職員の皆様に感謝申し上げますとともに、新潟大学のますますのご発展を祈念します。



母校での43年間

自然科学系教授（農学部）
早川 嘉一

大学の将来、教育のこと、研究について熱く語り明かしたことが昨日のことに感じられます。

1962年（昭和37年）の春、卒業と同時に農学部の助手に採用されて以来母校の教員として43年間無事に勤めることができました。恩師の先生方の温かいご指導、諸先生方の労を厭わないご支援、事務の方々のご協力そして学生さんの若いパワーとエネルギーを頂きここまで歩んでこれました。心より感謝とお礼を申し上げます。

農学部は五十嵐キャンパスに統合移転する1974年までは新潟市西北部の小金町にあり、松林とアカシア並木に囲まれた木造校舎で研究施設等はまだまだ質素でしたが、アカデミックなキャンパスで大学の将来、教育のこと、研究について熱く語り明かしたことが昨日のことに感じられます。

五十嵐キャンパスへの統合移転がなされてからは総合大

学として充実発展してきました。今、中庭に舞う春雪を研究室の窓から眺めながら昨年県内を襲った7.13豪雨災害、中越地震災害の調査資料を整理しているところです。

顧みると、災害研究へ進むきっかけは教員として歩み出した年の松之山大地すべり災害（1962年）、その2年後の新潟地震災害（1964年）、更に3年後の羽越豪雨災害（1967年）の調査でつぶさにその痛ましい惨状を経験したことによって、そのメカニズムの解明と災害対策の確立めざして取り組んできました。以後の妙高土石流（1978年）や県北地震（1992年）等の数々の災害研究調査に関わりながらも、今回の水害と地震の悲惨な爪痕を目にしたとき、この43年間やってきたことは何だったのか自分の限界と自然のエネルギーの大きさを改めて感じているところです。自然の営みを謙虚に見つめ直し“若き夢”の実現に一步でも近づけるよう再度チャレンジして行きたいと思っております。

この度、新潟大学として学際的な新潟大学中越地震調査団を立ち上げ、調査研究が進められていることは災害科学の発展と地域社会への貢献に多大なものがあると期待を致します。新潟大学のさらなる飛躍を祈念しペンを置きます。長い間有り難うございました。



現地調査にて（本人前列右）



みなさんへ

人文社会・教育科学系教授（人文学部）
佐藤 信行

長く教員生活を送ることができましたことを心から感謝いたします。

今日まで長く教員生活を送ることができましたことを心から感謝いたします。

新潟地震の翌々に初めての地で、ドイツ語教師の道をスタートしました。大学ごとの個別の問題がどうあれ、学部自治会の枠を越え、全学共闘会議（全共闘）へと高まっていった日本の学生運動、一方でまた全世界的なスチューデント・パワーの嵐を目の当たりにして、大きな衝撃を受けました。ドイツ語を教えること、教師と学生の関係、制度としての大学など、それまで自明であったあらゆることについて、根底から考え直さなければなりません。それは相当に困難な試行錯誤の連続でした。

80年代半ばのペレストロイカとグラスノスチを源とする大きな流れは、ベルリンの壁を崩壊させ、ドイツの統一をもたらし、極東の大学にまで波及し、ドイツ語教育の基盤であった部局・教養部を解体させました。この間の大学に関する多くの出来事は、その延長線上にあるといっても過言ではありません。外国語教育の一変、学部における新たな演習や講義の担当、従来とは異なる方法で文学や映画を考えることなど、押し寄せる課題は身に余るものでした。ドイツ映画『BOOD BYE, LENIN!』の好青年アレックスにはほど遠く、老いたファウスト博士のようにメフィストの魔力による若返りもできませんが、一書生として、勉強を続けていきたいと思えます。

最後に、みなさんのご健闘をお祈りいたします。

退休に際して

人文社会・教育科学系教授（教育人間科学部）
清田 文武



青島大学最初の中外学者跨文化学術研討会（2003年9月24日、参加者同大教授陣）で講師を務める。撮影は同大（現華中師大）李俄憲教授。

新潟・長岡・高田の3地区に分かれていた学部の懸案の統合、続く大学院の設置には思い出も多い。

学生時代を含めると旭町で14年余、五十嵐に移ってからを合わせ、本学には37年余お世話になった。学生の時の机の上には雪が降り積もったりするほどのボロ校舎であって、現在からすると隔世の感がある。しかし、その後本学はめざましい発展を遂げて今日に至っているが、この間、全学の教職員からご指導・ご支援をいただき、学生諸氏にも恵まれ、同窓生からも恩顧をこうむった。心より御礼を申し上げたい。

特に、新潟・長岡・高田の3地区に分かれていた学部の懸案の統合、続く大学院の設置には思い出も多く、また平成4年度の放送公開講座（放送はBSNのラジオ）は、テキスト作り、放送、スクーリング等今も鮮やかに脳裏に蘇る。

退任

平成10年からの4年間は教育学部からの名称変更を伴った教育人間科学部附属新潟小学校に併任となり、ここでも思い出は少なくない。「砂山」で新潟の子供たちにゆかりの深い北原白秋の高足、宮柗二作詞にかかる校歌の語を織り込み、卒業式には、

旅立ちのときわが丘や春の虹
と詠んで、はなむけの言葉に添えたのであった。退休に際し、一句の句意とともにゲーテ作『ファウスト』の最後の場面を思うことである。

本学に弥栄のあらんことを。



感謝の言葉

人文社会・教育科学系教授（教育人間科学部）
田中 弘子

附属校園に足を運ぶたびに子どもたちの成長ぶりを確かめることができ、貴重な経験をさせていただきました。

新潟大学には、1974年から31年間お世話になりました。五十嵐キャンパスへの統合移転に始まり、大学院の創設、教養部の解体、(財)日本臨床心理士認定協会による指定大学院の開設、また国立大学法人化に伴う組織改編など、その都度大きな課題と取り組みつつ、時にはあえぎながらまた耐えしのびながら、一所懸命に教育と研究に頑張ってきたというのが実感です。その間、実に多くの方々に出会い、支えられ、大変お世話になりました。この場をお借りして、心より御礼を申し上げます。

多くが既に卒業して、教育や臨床心理学の専門家として、また、公務員や福祉をはじめ多くの分野で活躍している学生との出会いからは、若さと元気をいただきました。

1988年から足かけ12年の間の8年間は、附属幼稚園の園長として、長岡キャンパスに通いました。これは、3歳児として受け入れた子どもたちが中学校を卒業するまでの期間に当たるため、附属校園に足を運ぶたびにその成長ぶりを確かめることができ、貴重な経験をさせていただきました。

また、学生時代以来のライフワークとなった生きがい研究の一部が実存心理検査としてささやかながら結実し、医療や福祉、また教育や研究の分野で広く活用されるようになったことはあり難いことです。

お世話になった同僚の先生方には、法人化に伴う生みの苦しみが将来の大きな実りにつながることを祈り、また、学生のみなさまには、ひとりひとりの夢を大切にされ、それを大きく育ててゆかれますように祈ります。





生物と生き物は日本人の感覚としては違うように思います。生物において、動物は脊椎動物と無脊椎動物に分類されますし、その脊椎動物は哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類に分けます。生き物は獣（けもの）、鳥、魚、虫（爬虫類、昆虫、得体の知れないもの）に分類されます。したがって、生き物は生物の同義語ではありません。生物（動物）は人間を含まないことが多く、人と動物というように対立概念として用いられます。一方、生き物は日本人の自然観を反映しています。

人と動物の関係学から動物を分類しますと、家庭動物（愛玩動物、伴侶動物）、産業動物（実験動物を含む）および野生動物（無主物）に分けられます。最初に、産業動物の光と影について考えてみましょう。21世紀の最大の問題の一つとして、人類が肉食率を高めていることが上げられます。肉食は確かに人々の体格を向上させ、健康増進に貢献しましたが、一方では肉食率が高まったことにより、歪みもでてきました。鶏肉、豚肉、牛肉各1kg生産するのに、鶏肉では2.5kg、豚肉では4kg、牛肉では7kgの穀物を必要とします。一人当たりの年間穀物消費量はアメリカ800kg、日本400kg、インド200kgですから、家畜が消費する穀物の量が桁外れに多いことがおわかりでしょう。また、穀物消費量は世界の中で、貧富の差が拡大していますが、開発途上国の富裕層も急速に肉食率を高めています。世界の穀物生産量は、

1950年には63,100百万トン、一人当たりの生産量は247kgですが、2000年は183,600百万トン、一人当たり302kgです。世界の穀物生産量は3倍ほど増加していますが、一人当たりの生産量はそれほど増えていません。世界の総耕地面積は15ヘクタールで、そのうち土地劣化が7 - 14%です。さらに砂漠化や塩害で農地は減少してきていますので、これ以上の穀物生産は望めません。それにもかかわらず、肉食率は高まってきていますので、近い将来には世界の食糧事情を脅かすこととなります。肥満人口が12億人を超えた原因の一つは肉食率が高まったことにあります。一方では、膨大な数の家畜を閉じ込めて肥育する近代畜産業は深刻な糞尿処理問題と動物福祉論争を引き起こしています。21世紀は畜肉の大消費文化を見直す時期かも知れません。日本は100年で人口が4倍（1億2千万）になりましたが、世界の人口も16億人から63億人へ4倍も増加しました。さらに、毎年7,000万人ずつ増加して、2050年には89億人に達するといわれています。このような人口問題と食糧問題の解決に向けて近代産業の効率主義を再考するとともに、開発途上国の有畜農業を見直すことも重要でしょう。

家庭動物について考えてみます。1973年10月に議員立法により「動物の保護及び管理に関する法律」が制定され、また「動物の愛護及び管理に関する法律」も1999年12月に議員立法により制定されています。このような法律が制定されたことにより、動物の管理が下手な日本人は戸惑っています。欧米では、動物は管理する対象です。したがって、動物の管理の理念と技術はとても高いのです。動物を敬して遠ざけてきた日本人は、自己責任で動物を殺生できませんが、しかしそれは美德でもあります。現代は管理するのではなく、世話（care）をする時代です。欧米のような「管理の思想」だけでは、新しい「人と動物の関係」は築けません。日本の家庭には1,100万頭の犬と800万頭の猫が暮らしています。犬の殺処分は

1970年には60万頭に達していましたが、2001年は10万頭余りです。そして今は「人と犬は一心同体」といわれています。これはマスメディアを通して徹底したイメージ作戦で、新しい分野の攻勢です。確かに、「犬と暮らしているとストレスがあっても通院回数は増えない」、「犬と一緒にいると冠状動脈疾患一年生存率が上昇する」、「ペットと暮らすと中性脂肪やコレステロール値が下がる」というようなデータもあり、その効果が指摘されています。

日本にも職業犬が登場しました。訓練性能が高いという犬の特性を捉えて、警察犬や軍用犬とは別の役割を担う職業犬、これをProfessional dogsと呼びます。この職業犬は身体障害者補助犬(Assistant Dogs)、救助犬(Rescue Dogs)、セラピー犬(Therapy Dogs)などがあります。身体障害者補助犬は2002年10月に全政党が賛成して議員立法で成立しました。これによって、身体障害者補助犬は公共施設へ自由に出入り可能になりました。救助犬は、日本では阪神大震災で活躍したことはよく知られていますが、その後に認知されました。外国では山岳救助犬、海難救助犬などが活躍し、日本でも消防庁が注目しています。セラピー犬は施設訪問活動としての役割よりも1,100万頭の家畜犬としての役割が大きく、年々増加しています。馬も犬と同様に職業動物に適し、教育、医療、体育の3分野で活躍しています。すでに、全日本障害者乗馬協議会が全国で42団体に増えていることからわかります。セラピーキャッ

ト(Therapy Cats)は800万頭の家畜動物として活躍していますが、犬や馬と異なり、訓練は不可能ですが、学校飼育動物には適しています。このように犬、馬、猫を中心に、日本における動物との新しい関係は進むであろうと思っています。しかし、「共生(Co-existing)」という言葉や「絆(Bond)」という言葉は美しいのですが、人と動物の関係性の本質を曖昧にする(誤魔化す)言葉の乱用は避けるべきであろうと考えています。

人は動物を愛しますが、一方では人は動物を食べますし、このことには矛盾が無いのでしょうか。動物を殺すことによって生ずる心の痛みから、いかにして回避すべきでしょうか。動物を殺すことによって生ずる心の痛みを回避する4つの方法があるといわれています。「食べる(利用する)動物は神が与えたもの」という一神教的回避法、「動物には心が無い、単なる機械的反応」とする哲学的回避法(動物機械論)、「動物慰霊祭」などで自分を慰めるアニミズム的回避法、「殺す人と食べる(利用する)人の分離」とする不幸な職業的分離があります。アジアにおける「人と動物の関係」が欧米における「人と動物の関係」は異なっているように思います。これは、文化の違いであります。どちらが優れているとはいえませんが、輪廻・共生を大切にするアジアの人と動物の関係は、もっと見直されるべきではないでしょうか。

(文責：農学部農業生産科学科 教授 楠原征治)

全学講義

「家計から見る日本経済」

京都大学大学院教授 橋木 俊詔



経済学部では、昨年末の12月14日、橋木俊詔先生に「家計から見る日本経済」というテーマで講演をしていただきました。橋木先生は、現在、京都大学大学院経済学研究科教授として教鞭をとられています。これまで第一線の教育者・研究者として活躍されてきました。その活動は、日本経済に関する理論的・実証的な研究にとどまらず、様々な問題に対する政策提言に及んでいます。また日本国内にとどまらず、外国の諸大学で客員教授をされるなど海外でも活動されてきました。

さて、橋木先生ご自身も指摘されているように、現代

の経済体制の下では、通常、企業が生産・流通の組織者であり、そのため経済理論・分析の中心になることが多いのですが、今回の講演では、消費の主体であり、また労働力（労働能力）を育成し企業に提供する経済主体でもある、その意味できわめて重要な意味を持つ家計（家族、世帯）に焦点を合わせて、「家計から見る日本経済」ということで御講演をしていただきました。きわめて興味深い内容であり、聴講した学生・教職員にとって有意義なものでした。

講演の内容全体をここで詳細に紹介することはできませんが、私にとって重要と思われたポイントをいくつか拾い上げ要約させていただきます。

上でも指摘したように、家計は教育などの経路を通じて企業に労働力を提供するという大きな役割を果たしていますが、そのあり方は歴史的に変化してきました。伝統的な社会では、例えば戦前の日本では、男女（夫と妻）とも労働に従事し、その上、女性は家事労働という重要な仕事をしなければなりませんでしたが、戦後、この点は大きく変わり、夫は企業で働き、妻は主に家事労働を担当するようになってきました。これは女性の過重な労働からの解放という積極的な意味を持っていました。しかし、現在、状況はふたたび変化し、女性の社会進出（男女共同参画）が進んでいます。もっとも日本では、欧米と異なって、まだ M字型 が見られます。すなわち、一旦就職した女性が結婚や育児のために家庭にしりぞき、その後、子供が成長したのち、ふたたび社会に復帰するという傾向が見られます。

ところで、現在、少子化が大きな問題となってきています。この問題は、女性の出生率（1人の女性が一生の間にもうける子供の数）の低下と関連しています。人口が定常的となる出生率は2.0を少し超える値ですが、現在の日本では1.3を切ってしまいました。もちろんこのことは上述のこととも関連しています。実際には、家庭の外で仕事を持っている女性がより多くの子供をもうけているという統計結果もあり、もし人口を安定的にすることが必要と考えるならば、どうしたらよいかを考えなければなりません。

もうひとつ、現在、言いようのない不安が日本社会を覆っていますが、それは最近のつぎのような変化と関連しています。労働時間について言うと、「失われた10年」（平成不況）の間にデフレ不況、企業のリストラ努力の

下で、一方では、失業や非正規雇用（フリーター、パートタイマー）が拡大し、他方では、正規従業員の労働時間はむしろ拡大してきました。オランダやドイツではワークシェアリング が実施されてきましたが、日本では企業や労働組合の反対もあり実現されていません。またそれと同時に ジニ係数 が上昇してきており、現在の日本はかつての 一億総中流 時代とは異なり、むしろ米国や英国に次ぐ経済格差（資産・所得格差）の大きな国となりました。これには政府の経済政策（累進課税に代えたフラット税制の導入）も作用しています。例えば最近十数年の間に所得税の最高税率は70%から37%に引き下げられ、他方では消費税が導入・引き上げられました。

こうした現状の中で、どういう経済政策が好ましいかを考える必要があります。どういう政策（方策、手段）が好ましいか私自身の考えはありますが、しかし、もちろんどのような政策を採用するべきかを最終的に選択するのは人々（有権者）です。



以上の講演後、限られた時間の中ですが質疑応答を行い、教職員や学生からの質問に答えていただきました。橘木先生には難しい論題について非常にわかりやすく明瞭にお話をいただき、感謝しています。全学講義としてのテーマや内容から見て、他学部の学生や、より多くの教職員に是非参加していただきたかったと思っています。

（文責：経済学部経済学科教授 佐藤芳行）



Leafloop 渋谷友美

卒業制作のテーマは人体でした。細胞がいくつも寄り集まってできていて、常に再生と死滅を繰り返して人間は生きているということを知りました。そこで、人体が細胞でできているということを木で表そうと思いました。

几帳面な性格なので、木片一つひとつにヤスリをかける下準備に時間がかかったことと、心棒を立てる時に苦労しました。

どこまで細かくしていいのか、作品の作り込みの程度が分からなくなったり、最終的な目標が見えなくなったり、自分がやりたかったのはこれで良かったのかと、迷うこともありました。自分の想いがカタチになって完成できたことには満足ですが、計画性があればもっと完成度が上がったと思います。



彫塑

卒業制作

— 教育人間科学部・大学院教育学研究科 —

JAPANESE PAINTING

OIL PAINTING

DESIGN

SCULPTURE

EDUCATION OF ART

HISTORY WESTERN FINE ART

HISTORY OF ORIENTAL ART

こどものあとⅠ こどものあとⅡ 丸山葉子

楽しい授業で子どもたちの創造性、社会性を育むという論文を書いている、障害を持つ子どもたちが自分で遊び方を見つけることができたらすごいと思いました。粘土を好きな子が結構いたので粘土のプールみたいなものを作ったら面白いなど。何が大変って、300キロの粘土を運ぶのが重くて一番大変でした。

子どもたちのことが好きで、光を当てたかったのです。普段とは違って、粘土遊びをしている時はすごい集中力がありません。

学校教育課程は、卒業論文と卒業制作の二本立てなので苦労しましたが、「子どもに寄り添っているのが良くわかった」と先生に評価をもらった時、思わずジーンとききました。

大学院でもまた何か面白いことをやろうと思っています。



Leaf 江口妙子

子どものおもちゃをつくりたいという想いがありました。おもちゃって何だろう、遊びって何だろうと考えた時、実際に遊んでいる子どもたちを見てみようとして幼稚園に行きました。多くの子どもがしている行為が見えてきました。その要素を取り出して、組み合わせでいい形が生まれないかなと。それを表現するにはプラスチックしかなかったです。新しい素材に挑戦したので苦労しました。

完成度としては50点くらいで満足していません。時間があつたらもう少しこだわりを持って、きれいなラインが出せたと思います。

卒業制作展で、人の感覚に訴えかける、もしくは寄り添うものをつくるという自分のテーマを探し当てたような気がします。



BYO:BU 水落大介


今までレターセットなどの雑貨をつくっていましたが、個性的なデザインができず、ありきたりなものになっていました。そこで、以前から興味があった扇や屏風を取り入れ、和の雰囲気がある新しいデザインの雑貨を提案したいと考えました。一から形もデザインも考えることに、苦心しましたが、自分の部屋に置きたいと感じてもらえるような作品づくりを心がけました。

大学時代は、自由にやれる最高の時間です。目標をもって過ごしてください。


卒業制作
「こどものあと」「こどものあとII」

「遊びは子どもの自己表現」「遊びは質において芸術である」という考えに基づき、子どもの創造力を高めることを目的としたワークショップを行いました。対象は内閣小中学校から卒業の14名の児童たちです。
「こどものあとI」はさくら小中学校1組、「こどものあとII」はさくら小中学校2組の作品です。


ワークショップ
ねんどのなかで遊ぶ



このような粘土（赤土）で遊ぶことができます。




赤土の上で粘土遊び




ねんど「あと」です

さくら 1組



さくら 2組



卒業制作

— 教育人間科学部 —

— 大学院教育学研究科 —



洋画

HER LIFE

阿部育子

スプーンをもってご飯を食べる祖母を見て、「生きている」ことを実感したのがこの絵を描こうと思ったきっかけでした。この作品で生命観・死生観が表現できればいいなと思いました。見てほしいところは、祖母の顔のしわです。表現するのに一番苦労しました。

この作品づくりを通して、施設に入ってから交流が少なくなっていた祖母とのコミュニケーションが増えました。大好きなおばあちゃんを書いているというのが作品づくりの一番のエネルギーになりました。

また、「内野deアート」というイベントのときに、一つの小路に面する各家に家紋の入ったのれんをデザインし、飾らせていただきました。学生時代の楽しい思い出の一つです。

■表紙

骨・化・石

大理石

市川香苗

海で骨を見つけたときに、その美しさに感動して、この作品を構想しました。もともと大理石で作品づくりをしたいと考えていたので、大理石と骨の質感がリンクしたんです。

大学4年間では、作品づくりに対して未消化でした。この「骨・化・石」の作品は、6年間の集大成として、とても満足しています。在校生のみなさんも、他人からの評価を恐れず、自分の表現したいことを思いっきり表現してください。



日本画

黄色い信号

久納紹子

とにかくおもしろいことを描きたいというのがありました。日常や何気ないことでもちょっと視点をかえるとおもしろくなるというのを表現できればいいと思いました。

普段、お笑いなど笑えるもの、おもしろいものが好きなので、その感覚で、見る人に美術をもっと身近に感じてほしいですね。学生時代は、音楽サークルと美術制作の両立が難しかったです。音楽サークルは、みんなでわいわい騒いで楽しいのですが、反面、美術はストイックで自分と向き合う必要がありますからね。今後の進路として、大学院も考えているので、もっと美術に力を入れていきたいです。

新大広報 Back Number

▼▼▼ 151号 ▼▼▼
〈新大での思い……〉

▼▼▼ 152号 ▼▼▼
〈新生活応援〉

▼▼▼ 153号 ▼▼▼
〈Open Campus〉

▼▼▼ 154号 ▼▼▼
〈可能性への挑戦〉

バックナンバーが欲しい方は、学務部学生生活支援課まで受け取りに来て下さい。新大広報のバックナンバーは、

<http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp/kouhou/index.htm>

でも見るすることができます。大学の魅力を先輩たちが語っています。ぜひ、どうぞ。

新潟大学広報誌 CampusForum 学生編集委員募集

問い合わせ先 ● 学生生活支援課 (262-6089) または各学部の広報委員まで。

広報委員会第1部会

● 部会長・編集委員長	寺田 真人 (医歯学総合病院)	Tel 227-2975	tera@dent.
● 委員	石坂 妙子 (教育人間科学部)	Tel 262-7116	ishizaka@ed.
	岡田 昌浩 (法学部)	Tel 262-6545	okada@jura.
	柳 喜重郎 (経済学部)	Tel 262-7660	yanagi@econ.
	徳江 郁雄 (理学部)	Tel 262-6112	itok-pc@chem.sc.
	牛木 辰男 (医学部医学科)	Tel 227-2058	t-ushiki@med.
	川瀬 知之 (歯学部)	Tel 227-2927	kawase@dent.
	新保 一成 (大学院自然科学研究科)	Tel 262-7543	kshinbo@eng.
	崎村 建司 (脳研究所)	Tel 227-0619	sakimura@bri.
	岩本 義男 (学務部長)	Tel 262-6080	iwamotoy@adm.

● 事務局 (学務部) Tel 262-6089 Fax 262-7516 korisi@adm.
(E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの表記を省略しています。)

● 新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

この広報は再生紙を使用しています。

編集

発行

新潟大学広報委員会
新潟大学学務部

印刷

株式会社 博進堂